様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月１０日現在

機関番号：34301
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2009～2010
課題番号：21820066
研究課題名（和文）ルネサンス詩におけるアレゴリーの変容―ロンサールからキリアンへ―
研究課題名（英文）　Transformation of the Allegory in the Renaissance Poetry - from Ronsard to Quillian
研究代表者　林　千宏（HAYASHI CHIHIRO）
大谷大学・文学部・助教
研究者番号：80549551

研究成果の概要（和文）：本研究はルネサンス期の詩的言語，特にアレゴリーの変容を明らかにするものである。具体的には 16 世紀フランス最大の詩人ピエール・ド・ロンサールと同世紀末における詩人ミシェル･キリアンを主な対象とし両者の描写詩の在り方を比較することで，ロンサールが大きく発展させた神秘神学的詩法と，言葉の機能そのものを問うキリアンの「理性的」詩法の違いを検討するものである。

研究成果の概要（英文）：The subject of this study is to clarify the transformation of allegoric poetics in France during the sixteenth century. Particularly, I will discuss two French poets, Pierre de Ronsard, greatest poet of this era, and Michel Quillian, poet in the last years of the Renaissance, and compare their descriptive poems to examine the difference between the mystical poetics developed by Ronsard and Quillian's rational poetics which focus on the function of language itself.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	730,000	219,000	949,000
2010 年度	910,000	273,000	1,183,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,640,000	492,000	2,132,000

研究分野：フランス 16 世紀文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学
キーワード：ミシェル・キリアン，16 世紀フランス文学，ピエール・ド・ロンサール，アレゴリー文学，エクフラシス

１．研究開始当初の背景

報告者はこれまでの研究で，とりわけ 16 世紀最大の詩人ロンサールを中心に異教神話というアレゴリーとエクフラシス(ekphrasis)の結びつき，また記憶術との関係を示し，この三者の関係が大きな流れとなって 16 世紀を貫いていることを示してきた。エクフラシスとは詩句による美術工芸品や壁画などの細密な描写を意味し，ホメーロス『イーリアス』におけるアキレウスの盾を代表例として，後の叙事詩ではこうした描写を物語に挿入することが不可欠となった。報告者が注目したのは，ロンサールの作品中にこのエクフラシスが神殿の描写という形で現れる点である。詩人ロンサールが作品中で神殿の内部を散策し，そこここに掲げられ，彫りこまれた美術品の描写をしていくとき，その展開に，記憶すべき事柄を建築物という「場」に結びつける古代以来の知的修練法たる記憶術が暗示されていることは明白であった。

イエイツは『記憶術』(1966)の中で，中世を通じて実践されてきたこの技法に，ルネサンス期の哲学者達が新たな意味を与えようとしていたことを論じたが，ロンサールもまたアレゴリーとしての異教神話を描く際に，この記憶術という展開（枠組み）を利用することによって，自らの創作の源としての「記憶」と，読者の「記憶」の両者をその視覚性において結びつけようとしていたと報告者は考えた。

このような観点からルネサンス詩を見ていくと，他の詩人達の作品にもエクフラシスと記憶術の結びつきが見られることが明らかとなった。だが，アレゴリーの用法はロンサール以降大きく変化し，結果としてエクフラシスとの結びつきの意味も変化していく。そこで報告者は，この三つの要素の結びつきの変化をたどることで 16 世紀から 17 世紀に至るフランス詩におけるアレゴリーという重要な一側面を明らかにできるのではないかと考えた。

しかしながら，この三者の関係が，17 世紀の古典主義詩学が現れるまでにいかなる変容を遂げたかを調査するとき，大きく二つの問題点が浮上してきた。それは

(1) 16 世紀末期の詩人の詩作品研究（ロンサールで得た結果の有効性の検証）が不可欠であること，

(2) だが，16 世紀末期（17 世紀初頭）の詩人に関しては，詩作品の批評校訂版を確立するという基礎研究さえもが十分に進んでいないのが現状であること，

の二点である。

そこでこの状況を打破すべく，数多く残された 16 世紀末期の詩作品の中から，報告者はロンサールと同じくカトリック詩人で，作品の規模・内容共に，より評価されてしかるべきキリアンの *La Derniere Semaine* を取り上げ，テクストを整備しつつ研究をすすめていくという着想を得た。

この研究を進めるにあたって現在の 16 世紀フランス詩の研究状況を概観するなら，プレイヤッド派を中心とした研究分野に加え，これまで不当に低く評価されてきた，あるいは知られていない詩人達の積極的な再評価の動きが見られる。例えば，2006 年に出版されたフランス文学史の概説書 *Histoire de la France littéraire* では，ルネサンス期においてこれまで取り上げられることのなかった詩人達の名が多数挙げられ，従来のフランス文学史に見直しを迫る内容となっている。これは，作品研究，歴史研究の進歩と，それに伴う近年の優れた批評校訂版の出版とともに，当時の詩作品が発表された文脈や，その試みの意義が明らかになり，作品の正当な読解が可能になったことに由来する。したがって，16 世紀詩研究において今後一層求められるのは，現在は知られていないものの当時一定の評価を得ていた詩人達の再評価，そしてこの時代の詩作品のテクスト整備であると言え，報告者の研究もその流れに位置する。

２．研究の目的

本研究の目的は，ルネサンス期の詩的言語，特にアレゴリーの変容を明らかにするものである。具体的には 16 世紀末期におけるカトリックの叙事詩人ミシェル・キリアン（Michel Quillian）に注目し，ルネサンス期の詩的言語の中心を占めたアレゴリーが，ロンサール以降 17 世紀の古典主義詩法が開花するまでに，時代とともにどのように変容していくかを検証し明らかにすることを目的とする。その際，叙事詩に不可欠な描写技法たるエクフラシスに着目し，アレゴリー表現の持つ視覚性との関わり，またエクフラシスがもたらす構造上の重層性を手がかりの一つとする。

３．研究の方法

本研究はこれまで殆ど研究の進んでいない 16 世紀末期におけるカトリック詩人ミシェル・キリアンを中心とし，ロンサールらプレイヤッド派の登場をもって開花したフランス・ルネサンス期のアレゴリー詩法の変容を辿ることを目的としている。キリアンの属する時代―マニエリスムあるいはバロックとも呼ばれる―の複雑な詩法の特徴を抽出するために，プレイヤッド派のアレゴリー詩法との対比のもとに検討を加える。加えてキリアンの批評校訂版確立のため，文献収集および歴史的資料の収集を行う。

宗教改革を巡って 16 世紀後半の詩人達が最も影響を受けたのは，そのアレゴリー表現を巡っての議論である。異教的なものをできうる限り排除しようとするプロテスタントに対し，カトリックは異教的なものを，中世を通じて受け継がれてきたアレゴリーであるとして，引き続き使用し続ける。カトリックがこのように異教的イメージを使用する根拠の一つとなったのが視覚の有用性であり，例えばイエズス会はこの視覚性を非常に重視する。この視覚重視の背景には古代より受け継がれてきた記憶術の存在を忘れることはできない。そして，中世には神学者達の学習手段であったこの記憶術は，そもそも古代ギリシャの詩人シモニデスに由来するとされたことからも明らかなように，詩作と深い関係を持っていた。ロンサールも意識していたアレゴリー表現におけるこの視覚性，そしてその記憶術との関わりは，16 世紀末期

キリアンの *La Derniere Semaine* においてどのように捉え直され，変質を遂げていくのか。平成 21 年度は宗教改革・反宗教改革がカトリックたるキリアンにもたらした影響について検討し，同時にプレイヤッド派とりわけ 16 世紀において「詩人の王」とされたカトリック詩人ロンサールの影響を検証する。

４．研究成果

本研究においては 16 世紀後半の詩人ミシェル・キリアンの作品『黙示週』（*La Derniere Semaine,* 1597）を中心に扱い，この作品の視覚的側面に注目することで，フランス 16 世紀最大の詩人ピエール・ド・ロンサールとの関係，そして 16 世紀から 17 世紀に至る時代におけるアレゴリー詩法の変容を検証した。具体的にはロンサールが古典詩から継承し，その作品群において大きく発展させたアレゴリー詩法，そしてそれに密接に結び付く視覚表現の技法をキリアンはどのように受け継いだのかを検討し，キリアンの文学史上の位置づけを試みるものである。

なぜキリアンなのか。キリアンの『黙示週』の主題は世界の終末ある。そこで描かれる出来事すなわち飢餓や戦争などは当時詩作品の描写において取り上げられるべきとされた主題，「心に強い印象を与える」主題であった。これはユマニスト，エラスムスの著作『ことばとものの二様の豊かさについて』（*De duplici copia verborum ac rerum*）においても述べられているが，『黙示週』はその主題からも描写的であるべき作品であり，また実際にも極めて視覚的，描写的な叙事詩であった。同時に聖書とりわけ『ヨハネの黙示録』を主たる源泉とするこの作品は真にアレゴリックな作品と言える。

古代ギリシャの詩人であるシモニデスは「詩は話す絵，絵は話さぬ詩」という言葉を残し，ラテン詩人のホラーティウスも『詩論』において「詩は絵のように」と述べている。このように古典詩の影響を受けた当時の詩人たちは，詩における視覚性を重要視していた。実際に彼らの活動を考えた時，同時代の画家たちとも交流があり，また宮廷において絵画作品を目にしていた詩人が絵画に影響を受けつつ詩作したことは明らかだ。

こうした絵画との近接性をもって，視覚的である，あるいはイメージを喚起しやすいとしたが，そもそも詩において重視された視覚性あるいは，イメージの喚起のしやすさにはどのような効果があり，またそれは詩においてどのような役割を担っているのだろうか。

具体的にロンサールの詩から視覚性，イメージ喚起の効果あるいは役割を考えるために注目したのが，ロンサールの叙事詩的作品に多くみられる描写技法（エクフラシス）である。特にロンサール自身が絵画を含む美術工芸品の詩的再現として創った詩句にこそ詩人の考える「視覚性」「イメージ」といったものが明らかに現れ，またその効果もみとめられると考えたからだ。そうしたエクフラシスの分析を通じて導き出されたのが記憶というテーマである。

エクフラシスという描写技法で古来の理論家たちが重視したのは，それが実在，不在を問わず読み手の目にありありと描き出す「活き活きとした」描写でなければならず，さらには読者の感情に訴えかけなければならないという点である。こうした効果は *enargeia* というギリシャ語に由来する用語で言い表され詩人たちに重視されたが，例として挙げられるのが「夢」で，エクフラシスはまさしく「目覚めたまま観る夢」のような描写である必要があった。

エクフラシスすなわち描写が目指すべきこの効果が注目に値するのは，それが記憶における視覚情報の役割に通ずるからである。アリストテレスは『魂について』で，記憶の方法として記憶すべき事物を「目の前に置く」と表現し，キケローは『弁論家について』で，記憶するためにはその記憶されるべき事物は「目立ち，我々の心に強い印象を与えるもの」であるべきだとする。これは当然ながらエクフラシスの効果と直接関係することになるが，実際にエクフラシスがロンサールの詩で果たしている役割を見ると，ロンサールが描写の，記憶との関わりに気付いていたことは明らかだ。そこで作品に現れる記憶の表象を整理した後，本研究でとりわけ注目したのが次の三つである。まず個別の作品の展開にとり入れられた古代以来の記憶術，そしてロンサールが自らの詩作品の永続性を得られると考える読者の記憶，そしてテクストの古典文学との関係や同時代の知の世界における位置を明らかにする作者および読者の記憶である。この三つがロンサールの視覚表現においては有機的に関連していることを，エクフラシスでとりわけ描かれることの多いギリシャ・ローマ神話のモチーフを手がかりに検証した。

同時代の絵画においてもしばしば描かれるギリシャ・ローマの異教神話の神々あるいは人物たちが記憶との結びつきにおいて重要である点はまず，それが詩人にとっては抽象概念を視覚化する表現技法であったこ

と，またそれらはロンサールの持つ古典文学についての知識あるいは記憶を基にしており，読者は同じ記憶を持っていることによって初めて解釈できるという点である。ロンサールらが古典作品を読む際に行っていた解釈とは異教神話をアレゴリーとしてキリスト教的文脈で読み直すものであり，そこにはネオ・プラトニスムの影響が色濃く表れている。ロンサールは，今度は自らが詩作を行う際に，これら読解の伝統に基づいて，異教神話という覆いで真理を「隠す」とした。ロンサールがこのように自らの詩には「隠された真理」があるとした時，そこにはテクストとその意味との関係を保留するという創作態度が見られる。つまりエクフラシスという視覚表現においてロンサールが提示しているのは，語のもつイメージの喚起力であり，またそこで喚起されたイメージとその語の持つ意味とが記憶あるいは想起の働きにおいて，様々な読解を可能にしている，つまりは詩が豊かに再生産されていく様を歌っているのではないかと分析した。

これらの考察で明らかになるのは，彼の描写表現において詩の創作と解釈の関係，あるいは詩の永続性の問題が明瞭な形で現れていることだ。つまり詩の視覚性，あるいは語の持つイメージの喚起力を介することで，詩に多層構造を持ちこんでいるわけだが，こうした複雑な構造を描写に持ち込んだロンサールを一つの模範として，ミシェル・キリアンはそこからどのように自分自身の詩を創り上げたのかを彼の主著『黙示週』から考察した。

本研究で取り上げる『黙示週』とは聖書の『ヨハネの黙示録』を源泉とし，世界が終末を迎える一週間を描いた作品である。作品全体が夢に見た映像である，という点もエクフラシスの「目の前に置くような」という効果と一致する。つまりその題材といい，設定といい，作品全体が一つの描写であるかのような構成となっているのだ。

この作品を論じるにあたってまずはロンサールとキリアンとの共通点そして相違点を検討するため，『黙示週』本来の構成を無視し，最終日である「七日目」に見られるエクフラシスの分析から始めた。ここでエクフラシスは天国の神殿に飾られた絵画という形をとり，そこに描かれるのは旧約・新約聖書の神による奇跡譚である。

ロンサールのエクフラシスの一つの特徴として挙げられるのが，一連の比喩によって，画家，神，そして詩人という，三者の「創造者」としての側面に焦点を当てるのに対し，キリアンは「七日目」で天国の神殿に飾られた絵画を歌うとき，語る主体を何よりも「見る存在」として表現する。まずこの点にロンサールとキリアンの最初の違いを見出した。この「見る」という行為は，一つには詩人の聖書を語る際のスタンスを表していよう。またこれは作品全体が夢であるという構造にも通じる行為である。キリアンの『黙示週』において，詩人である「私」は，神殿で絵画を眺めることによって，その絵を照らし出す光すなわち神の方へ眼を向けることになる。つまりイメージを介して詩人が眼に見えない神についての内面的瞑想へと向かうという構造になっているのだ。これはアウグスティヌスが，神の似姿（imago dei）たる人間は内なる記憶にこそ自らを創り上げた神を見出すことができると論じていることが根拠となっている。

こうしてキリアンのエクフラシスを見ると，そこでは明瞭さが重視されていることが見て取れる。明瞭さとは，描かれる物語の意味―神の起こした奇跡について―の明瞭さ，そしてそのイメージ使用の意味－イメージを介しての神の瞑想－の明瞭さである。一見してこれはロンサールの異教神話を多用するアレゴリーとは異なっているだろう。つまりキリアンにあってはイメージとその意味とが密接に結び付いているのだが，では彼の用いる異教神話はどうなのかという点から作品を検討し，特に注目したのが「二日目」そして「四日目」である。「二日目」は「戦争」を主題とし，「四日目」は「疫病」を主題とするが，「二日目」は異教神話の神々や人物の名がとりわけ多く用いられる日であり，「四日目」は異教神話の神が非常に限定的に用いられ，代わって医学的専門用語が多用され，「二日目」と「四日目」は互いに対を成すような日となっている。まずは「二日目」についてである。

この「日」の分析から挙げられる特徴は，主要な異教神話の神々が，四元素の「火」「水」「土」「空（気）」という言わば科学的用語に結び付けられて，この四元素を中心として神々が選ばれていることだ。ここでふたたび現れるアレゴリックな語彙の単純化，すなわち異教神話の神々の名を一義的な隠喩として用いる方法はキリアンの作品における一つの特徴とも言えるものだが，それが意図的なものであったことは，異教神話についてのキリアンの博識からも垣間見られよう。

これに対して，「四日目」の異教神話と科学的言説を見ると興味深い対立点が見られる。この「四日目」で用いられるのは，病

名などの医学的専門用語そしてその病を視覚的に描くグロテスクな描写だ。キリアンが医学的な専門用語を多く用いて詩作を行おうとしていたことはその詩句からもうかがわれる。キリアンはこの日において，自らの筆記具を「疫病」すなわちペストに伴う腫瘍であると歌っているが，それは明確な特定の意味を担った医学的語彙体系を専ら詩的言語，詩的装飾として用いることで，「四日目」が「世界の終末」という主題の，医学的専門用語による一つのヴァリエーションとなっていることを意味する。

　　するとキリアンがこの「二日目」，「四日目」の描写によって試しているのは，特定のテーマにまつわる語彙体系の隠喩的用法であると言えるだろう。つまり様々なイメージを喚起する神話表現，それに対する限定的な意味を担わされた医学用語という異なった二種類の言葉である。これはそれぞれの言葉がアナロジーによってどれだけのイメージを表現しうるのか，ということへの挑戦となるが，この問いは必然的にキリアンの作品における言葉とその意味の繋がりという問題へ，またアナロジーの作用する領域へと我々の意識を向けることになる。「飢餓」を主題とする「三日目」はまさしくこの問題を中心的に扱った章であると言えよう。

　　「三日目」冒頭よりキリアンは「飢餓」という主題を掲げながらも，この「三日目」のもう一つの主題に「詩作」があることを述べ，植物や動物類の列挙に移り，この列挙と詩作のテーマとが組み合わされることで「三日目」は展開していく。注目したのは，「三日目」で展開される百科全書的列挙の多くが，「飢餓」のために「存在しないもの」を表すことだ。この否定による列挙に「詩作」というもう一つの意味が結び付けられて，存在しないものを指し示す言葉の列挙が，同時に詩作を指し示す言葉の列挙でもあるという構造が導入されているのである。するとこの構造でキリアンが焦点をあてているのは，指し示される事物よりも指し示す言葉そのものだろう。つまりキリアンは，これらの歌われる事物が「飢餓」によって最初から存在しないものであることをあらかじめ宣言することで，言葉の，事物を眼前に置くかのような効果―これは先に *enargeia* という用語を用いて説明したが―そうした効果とその効果を生み出す言葉そのものの実体の無さを表現しようとしているのだと考えた。つまり，キリアンの歌う対象は，そのアレゴリー的な言語そのものなのだ。このように「三日目」には言葉，その言葉のもつイメージの喚起力とその意味との乖離を読み取った。

　続いて取り上げたのが「六日目」である。この日ではその文体（style）に注目した。というのも，「六日目」はキリスト教世界における最後の審判を中心主題とするが，最後の審判にまつわる諸テーマを歌うその文体が様々に変化しており，「六日目」が『黙示週』の文体を最もよく表していると考えたからである。

　例えば審判の場におけるキリストの姿はとりわけ視覚的に描かれ，イエズス会の修養の実践にも通じる。また，キリストの言葉を表すためにキリアンが用いた直接的引用，そして非常に明解な韻文での翻訳の手法はプロテスタントの詩人達を想起させるものだ。同時に，出典の明らかな聖書の挿入方法，そしてまたそれがキリストの語った言葉であるという点に注目するなら，これは神の言葉の「媒介者」たる詩人の役割を示しているとも言え，前世代のいわゆる新プラトン主義的な霊感の理論からは明らかに異なった詩人観を呈している。一方では，「時間」という抽象概念を描く際に異教神話が依然として用いられてもいる。

　　詩学的観点から，この文体と同時に考察したのが彼の詩人観である。それが最もよく現れるのが「五日目」だが，ここで描かれるのが反キリストである。反キリストとは終末に際して現れる偽りの預言者を意味するが，ロンサールらユマニスト詩人達はネオ・プラトニスム哲学に則り自らを神に選ばれた預言者であるとしていた。この哲学にも当然通じていたであろうキリアンが反キリストというモチーフを扱うとき，そこには彼の詩人観も垣間見られるのではないかと考えたからである。また，何より世界の終末という『黙示週』の主題自体が預言者によるものであることも指摘しておきたい。

　　テクストを検討すると，キリアンは反キリストという同時代的なモチーフを正統的カトリック信仰に反する，「理性を失わせる者」として描き，一方で自らの作品の構成，あるいは反キリストの表象そのものにおいて理性的たることを前面に押し出している。こうした理性の強調は詩人キリアンにとって何を意味するのだろうか。

　キリアンがこの詩作について語るのが第「一日目」である。この日は，これから詩人が歌う詩が「夢」であることを示す導入部だが，「夢」の描写が始まるまでの箇所で，「世界の終末」を歌うということの困難さを歌う。詩人は，その内容が神の司る領域である主題を歌う際には，理性によって天に近づこうと

することしかできない。だからこそ「私」たる詩人キリアンは「類似」「根拠」そして「推論」を用いる「理性的」な方法によって天に近づこうとするのだと歌い，実際に「夢」の描写に至るまでにその詩法を実践してみせる。だが，注意しなくてはならないのは，「一週間」という作品全体の構造が，眠りから覚めた詩人が導入したものであるにも関わらず，それを彼は第「一日目」という夢の中に設定していることだ。つまり詩人は，自らが導入した「一週間」という時間構造に彼自身も含まれているのである。すると創作をする主体までもが創作物に含まれてしまうという構造を備えていることになり，詩人が言葉を発している立場そのものが虚構の中へと組み込まれてしまうのだ。こうして詩人が語る言葉の信憑性もが宙づりになってしまい，「理性」による詩法も相対化されてしまうのである。この徹底した懐疑こそキリアンにとって真に理性的な詩法であったのではないか，というのが本研究において導き出された結論である。

ここで簡単に振り返るなら，最初に考察したロンサールの作品では，視覚的効果が絵画にも匹敵することが重視され，またその視覚情報の裏に多くの意味が隠されているというアレゴリックな構造が重要だった。一方でキリアンのテクストを前にする時読者は「そこに隠されたもの」を読み取るよりも，言葉が創りだす情景と，その情景を作りだす言葉の機能そのものに注意を向けざるを得ない。このように言葉のイメージ喚起力や，翻ってその虚構性を歌う詩作品は，そのことをより効果的に見せるために，一つの主題，例えば「飢餓」や「最後の審判」などに対し言葉を際限なく連ねていくという方法を取ることが『黙示週』の中でもみとめられた。これはある意味で *enargeia* の効果を，異なった方向から表現しようとしているとも言えるだろう。かくしてキリアンという詩人はロンサールのアレゴリー詩法，そして描写技法を継承しつつも大きく異なってきており，また詩法そのものも変化している。これがキリアン独自の動きであるかどうかは同時代の他の詩人の検討も必要となってくるが，キリアンの作品にはロンサールの多大な影響を残しつつも，明らかな変化が見て取れるのである。

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 林千宏， Le Jugement dernier dans *La Derniere Semaine* (1597) de Michel Quillian – Autour du « sixiesme jour » 「日本フランス語フランス文学会」(*Études de Langue et Littérature Françaises*), 査読有, No.97, 2010, pp.17-31.

② 林千宏，ミシェル・キリアン『黙示週』（1597）―第一日目における時間の表象―，*GALLIA*，査読無，No.50，2011，pp.95-104

③ 林千宏，動乱期の詩法―16 世紀末の詩人ミシェル・キリアンをめぐって，「西洋文学研究」，査読有，31 号，2011，pp.49-70

〔学会発表〕（計１件）

林千宏，ミシェル･キリアン『黙示週』(1597)における「最後の審判」―6日目を中心に，日本フランス語フランス文学会, 2009.11.07（於熊本大学）

〔図書〕（計１件）

林千宏，La poétique visuelle de Michel Quillian, poète héritier de Ronsard : les divers aspects des expressions visuelles de *La Derniere Semaine* (1597), （博士論文）, 2011

６．研究組織

(1)研究代表者

林　千宏（HAYASHI　CHIHIRO）

大谷大学・文学部・助教

研究者番号：80549551

(2)研究分担者

該当者なし

(3)連携研究者

該当者なし